令和四年度大阪信愛学院高等学校　入学試験問題

≪　国　語　科　≫

設問の都合で、本文及び表記を一部改めています。
字数制限のあるものは、指示がない限り、句読点を含むものとします。

〔一〕次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

テストというのは、出題者が一方にいて、受験者が他方にいることによって成り立つ性質のものである。そして、そういう構造が現代の教育にゆきわたってしまったものだから、なによりもぐあいの悪いことに、①およそ「問題」というものは、ひとさまからもらうもの、という思考習慣も**抜きがたい**[x]ものになってしまった。小学生、いや、幼稚園の段階から、「問題」は先生が出すものとソウバ[a]がきまっている。そして子どもたちは、出された「問題」を解くことに熱中して人生のスタートを切る。

A、そのこと自体は悪いことではない。いや、物事を考えるクンレン[b]は、若い人たちに「問題」を与えることからはじまるものだ。しかし、「問題」は、つねに先生だの、問題集だの、ドリルだのといったふうに外的に与えられるものだ、と考えてしまうのも、人間の精神にとって決してケンゼン[c]なことではあるまい、とわたしは思う。B、「問題」とは、ほんとうはそれぞれの個人が発見し、そしてつくる性質のものであるからである。

「問題」の発見などというと、たいそうなことにきこえるかもしれないが、C、テレビを見ていた子どもが、トツ[d]ゼン、テレビって、なぜ見えるんだろう、という疑問を抱いたとするなら、それが「問題」発見なのである。D、走り過ぎてゆく新幹線を見て、あの列車は何メートルの長さなんだろう、という好奇心を抱くのもまた「問題」発見である。なぜ、どうして、というあれこれの好奇心――「問題」というものは、そんな好奇心を**母胎**[y]**にして**、心の中から湧[わ]いてくるものなのだ。外から一方的に与えられるものだけが「問題」なのではない。

実際、哲学者の＊J・デューイは、「問題解決（problem solving）」という考え方を教育の中にドウニュウ[e]した人物として知られているけれども、かれは、「問題解決」よりも「問題つくり（problem making）」のほうが、ずっと大事だ、という主張をしている。つまり自分で、なにが「問題」なのか、その「問題」点をはっきりさせると、いったいどういうことになるのか、を考えることがおこなわれ、②それにつづいて、さてそれではその「問題」は、どのように「解決」できるかが考えられなければならないというのである。E、「問題」というものは、それぞれの人間がつくるべきものなのである。テレビはなぜ見えるんだろう、と考えた子どもは、そのとき、みごとにひとつの「問題」を自分でつくったのだ。

わたしは、デューイにならって、そんなふうに自分で「問題」をつくる子どもはすばらしいと思う。そして、そういう「問題つくり」をうんと力づけてやるのが大人の責任だと思う。もしも、子どもがこの「問題」を解くために、たとえば百科事典でしらべたり、図書館に通ったり、あるいは近所の電気屋さんに質問をしに出かけたりするなら、さらにこの子どもはすばらしい。自分で「問題」をつくり、かつ解くこと――それこそが精神の自律性というものであるからだ。

（加藤秀俊『独学のすすめ』より）

＊J・デューイ…一八五九年～一九五二年。アメリカの哲学者。

問１　二重傍線部ａ～ｅの片仮名を漢字に改めなさい。

問２　傍線部①とあるが、筆者は本来の「問題」の根本には何があるべきだと述べていますか。本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問３　空欄Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅに当てはまる語句を次から選んで記号で答えなさい。

ア　たとえば　　イ　もし　　ウ　つまり　　エ　なぜなら　　オ　やがて　　カ　もちろん　　キ　あるいは

問４　傍線部②「それ」の指示内容を本文の語句を使って五十字以内で答えなさい。

問５　本文で述べている「問題を作る」とはどういうことですか。文中の語句を使って二十字程度で答えなさい。

問６　太字ｘ「抜きがたい」、ｙ「母胎にして（母胎にする）」の語句の本文での使い方として最も正しいものを後から選んで記号で答えなさい。

ｘ　抜きがたい

ア　兄と弟の間にはいつの頃からか抜きがたい不信感が生まれた。

イ　彼の足の速さは尋常ではなく、５０メートル走で抜きがたい。

ウ　しっかりと食い込んだ釘（くぎ）はどうがんばっても抜きがたい。

エ　母は抜きがたい愛情で子供たちをしっかりと育てた。

ｙ　母胎にする

ア　二人の姉妹は母を母胎にして誕生した。

イ　友達には母胎にした優しさで接するべきである。

ウ　愛の精神はキリスト教を母胎にして生まれた。

エ　母胎にした考えでは自立した人間にはなれない。

問７　本文の内容に合致するものを次から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　与えられた「問題」を解くことは物事を考える訓練にはならない。

イ　デューイは「問題つくり」に、自主性を重んじる思想を認めた。

ウ　「問題つくり」から「問題解決」への過程を経るには論理性がいる。

エ　テストは、子どものケンゼンな成長を阻害するもので、廃止が望まれる。

オ　子どもに自ら「問題」を見つけることを支援しなければならない。

〔二〕・〔三〕は次のページ以降にあります。

〔二〕次の小説の主人公・清澄は、刺しゅうが趣味の高校一年生です。姉が結婚することになり、デザイナーである別れた父が作ったウェディングドレスに自分の手で刺しゅうを入れようと決めたものの、式が一週間後に迫っても、図案を決められずにいます。次は、姉の婚約者である紺野さんが清澄の部屋を訪れた場面です。後の問いに答えなさい。

もう時間がない。刺しゅうを入れるにせよ、入れないにせよ、はやく決めなければならないのに。

口ごもってしまった僕をちらりと見て、紺野さんが咳払いをひとつした。

「質問してもいい？」

「どうぞ」

「（　X　）、どういうきっかけで刺しゅうはじめたん？　いや、前から男子の趣味としてはめずらしいんちゃうんかなと思ってて」

あ、おかしいとか言うてるわけではないねんで、とぐいぐい①身を乗り出してくる紺野さんを「わかってます、わかってます」と押し戻した。刺しゅうをはじめたきっかけは、祖母がやっていたから。でももちろんそれだけではない。

「刺しゅうは世界中にあって、それぞれ違うトクチョウ[a]があるんです」

紺野さんが「へえ、そうなん」とふたたび身を乗り出す。

「たとえば日本にはこぎん刺しっていうのがあるんですけど、これってもともと布を丈夫にして暖かくするために糸を重ねたのがはじまりらしくて」

「ほう」

「あとね『背守り』って知ってます？　赤ちゃんの産着の背中に刺しゅうする習慣があったんですって。いわゆる魔除けです。鶴とか亀とかね。そういう図案を」

「ほう、ほう」

紺野さんが大きく頷く。姉はきっとこの人の②こういうところを好きになったんだろう。自分がものすごくおもしろい話をしているみたいで、悪い気はしない。

日本だけじゃない。ルーマニアのある地方では、娘が生まれるとすぐにその子の嫁入り道具のシーツや枕カバーに刺しゅうをはじめる。インドには「ミラーワーク」と呼ばれる鏡を縫いこんだ刺しゅうの技法がある。鏡が悪いものを反射して身を守ってくれる、と考えられているのだ。

「刺しゅうはずっと昔から世界中にあって、手法はいろいろ違うのに、③そこにこめられた願いはみんな似てるんです。それってなんか、おもしろいでしょ」

世界中で、誰かが誰かのために祈っている。すこやかであれ、幸せであれ、と。▲

高校生になってからいろいろな刺しゅうに関する本を読んだりしているうちに、もっとくわしく刺しゅうの歴史を知りたいと思うようになった。そこにこめられた人々の思いを、暮らしを、もっと知りたいと。

人に話すのはこれがはじめてだった。目標というほどたしかなものではなかった欲求が、言葉にした[b]シュンカンに輪郭を得た。そうか僕はそんなふうに考えていたのかと、目を瞠る。輪郭をよりくっきりしたものにしたくて、もう一度口に出した。

④「知りたいんです、もっと」

「すごいなあ。壮大やなあ」

「いや、壮大って、そんな」

「壮大な弟ができてうれしいわ」

そこまで屈託なく喜ばれるとこっちが恥ずかしい。身体の向きを変えて、じわじわ熱くなる頬を見られないようにした。

（中略　母がココアを持って部屋に入ってくる）

「ありがとうございます」

紺野さんが正座した姿勢のまま、頭を下げた。母はドレスには一べつもくれずに、トレイを紺野さんの脇に置いた。

「清澄くんってすごいですよね。お母さん」

母はなにか言おうとして、はげしく咳きこむ。風邪をひいたらしく、数日前からずっと咳をしているし、日を追うごと

にその咳ははげしさを増している。
でも「だいじょうぶか」と僕は訊ねないし、母もけっして僕のほうを見ない。涙目のまま、口元を押さえて部屋を出ていってしまった。
「お母さん、だいじょうぶかな」
「あの人、風邪でも仕事休まへんから。なんの意地か知らんけど病院にも行かへんし」
だからナオ[c]りが遅い。毎年のことだ。だいじょうぶかな、なんて心配する気にもなれないし、それに母のことだから良いタイミングで咳が出てくれたぐらいに思っていそうだ。紺野さんの「すごいですよね」に答えずに済むから。
⑤「母は嫌いなんです。僕が刺しゅうするのが」
なんでそんな悪目立ちするようなことすんの、というのが母の言いぶんだ。僕が学校でからかわれたり、いじめられたりしないか、ずっとそんな心配ばかりしている。
紺野さんはあいまいな微笑みを浮かべて黙っている。僕と母のどちらの肩を持っても角[d]が立つ、といったところだろうか。
実際、中学生までの僕はいつもひとりだった。母や祖母を心配させないように、高校に入ったら友だちをつくるためにがんばってみようと思ったこともある。でも自分の好きなことを好きではないふりをするのも、好きではないことを好きなふりをするのも、すごくさびしい行為だと気づいた。だから僕は刺しゅうをやめなかったし、無理して周囲に合わせるのもやめた。だけど。
畳の上に投げ出したスマートフォンがテンメツ[e]している。宮多が「ひまー」というメッセージを送ってきた。「こっちは忙しい」と返すと即座にパンダが泣いているスタンプが表示される。
僕は刺しゅうをやめなかった。だけど、□。
熱いココアがおいしくて、あらためて季節が変わったことを知る。春が来て、夏が過ぎて、秋になった。冬を待たずに、姉はこの家からいなくなる。

（寺地はるな『水を縫う』より）

問1　二重傍線部a～eのうち、片仮名は漢字に改め、漢字については読みを記しなさい。
問2　傍線部①「ぐいぐい」・④「知りたいんです、もっと」のような表現をそれぞれ何と言いますか。漢字で記しなさい。
問3　文中の空所（　X　）に補うべき語を次から選び、符号で答えなさい。
ア　いわば　　イ　実は　　ウ　そもそも　　エ　むしろ
問4　傍線部②「こういうところ」とは、紺野さんのどういうところですか。ここまでの内容を踏まえて自分の言葉で三十字以内で説明しなさい。
問5　傍線部③「そこにこめられた願いはみんな似てる」について、日本の「背守り」や海外の例に共通する願いとは何ですか。「になること。」に続くよう、文中の五字以内の語句を▲以前から抜き出しなさい。
問6　傍線部⑤「母は嫌いなんです。僕が刺しゅうするのが」について、それを最もはっきりと裏付ける母の行動を述べた部分を問題文から探し、過不足なく抜き出しなさい。
問7　文中の空所□に補うべきものを次から選び、符号で答えなさい。
ア　作業ははかどらなかった
イ　宮多はしつこく誘い続けた
ウ　友だちは残った
エ　代わりに友だちを失った

〔三〕次の古文を読み、後の問いに答えなさい。

文章Ⅰ　また、海中に蚓（*1きう）といふものあり。蛇に似て、角なきものと言へり。妻のはらみて、猿の生肝（いきぎも）を願ひければ、得難きものなれども、*2志の色も見えむとて、山の中へ行きて、海辺の山に猿多きところへ尋ね行きて、いはく、「海中に木の実多き山あり。a あはれ、おはしませかし。我が背に乗せて、*3具してこそ行かめ」と言ふ。「①さらば具して行け」とて、背に乗りぬ。

海中はるかに行けども、山も見えず。「いかに、山はb いづくぞ」と②言へば、「げには海中にア いかでか山あるべき。我が妻、猿の生肝を願へば、そのためぞ」と言ふ。③猿、色を失ひて、せむかたなくて言ふc やう、「さらば、山にて仰せられたらば、やすきことなりけるを、我が生肝は、*4ありつる山の木の上に置きたりつるを、イ にはかに来つるほどに忘れたり」と言ふ。「④さては、肝の料にてこそ具して来つれ」と思ひて、「さらば帰りて、取りて給へ」と言ふ。「左右なし。やすきこと」と言ひけり。さて、帰りて山へ行きぬ。猿の木に登りて、「海の中に山無し。⑤□を離れて肝無し」とて、山深く隠れぬ。蚓、ぬけぬけとして帰りぬ。

（『沙石集』より）

＊1　蚓　龍に似た想像上の動物。
＊2　志の色も見えむ　妻への愛情を示そう
＊3　具して　連れて
＊4　ありつる　さっきの

問1　二重傍線部a「あはれ」・b「いづく」・c「やう」の読みを、現代仮名遣いで記しなさい。

問2　傍線部ア「いかでか」・イ「にはかに」の意味をそれぞれ次から選び、1～8の番号で答えなさい。
ア　いかでか　―　1　どこに　2　どんな　3　どうして　4　いくつも
イ　にはかに　―　5　急に　6　遠くに　7　久しぶりに　8　知らぬ間に

問3　傍線部②「言へば」の主語を文中の一語で答えなさい。

問4　傍線部③「猿、色を失ひて」について、猿はなぜそのようになったのですか。簡潔に説明しなさい。

問5　傍線部①「さらば具して行け」・④「さては、肝の料（＝肝のため）にてこそ具して来つれ」について、それぞれの場面での話者の気持ちとして最も適切なものを次から選び、ア～エの符号で答えなさい。
①　ア　同情　イ　期待　ウ　あきらめ　エ　不安
④　ア（しくじった）　イ（信用できない）　ウ（だまされた）　エ（思った通りだ）

問6　傍線部⑤「□を離れて肝無し」の空所に入れるべき語を次から選び、ア～エの符号で答えなさい。
ア　山　イ　海　ウ　心　エ　身

問7　次の文章Ⅱは、蛇、亀、蛙（かえる）が仲良く暮らす池で日照りが続いて食料が無くなった場面を描いている。誘われた側の結末を文章Ⅰと比較として、正しいものを後の語群から選び、ア～エの符号で答えなさい。

文章Ⅱ

蛇、亀をもて使者として、蛙のもとへ「時のほどおはしませ。見参せん（＝会いましょう）」と言ふに蛙、返事に申しけるは、「飢渇（＝飢え）にせめらるれば、仁義を忘れて食をのみ思ふ。情けもよしみも世の常の時にこそあれ。かかる頃なれば、え参らじ」とぞ返事しける。げにもあぶなき見参なり。

語群
ア　文章Ⅰでは機転を利かせて助かるが、文章Ⅱでは誘いに応じて危険にあう。
イ　文章Ⅰでは自身のうっかりで大事なものを失うが、文章Ⅱでは誘いを断り危険をまぬかれる。
ウ　文章Ⅰでも文章Ⅱでも、甘い誘いに乗ったばかりに取り返しのつかないことになる。
エ　文章Ⅰでも文章Ⅱでも、臨機応変な思慮深い対応により、危険をまぬかれる。

問8　文章Ⅰ・文章Ⅱはともに説話文学である。同じジャンルの作品を次から選び、符号で答えなさい。
ア　今昔物語集　イ　源氏物語　ウ　竹取物語　エ　奥の細道

令和四年度　大阪信愛学院高等学校　入学試験
〈国語科　解答用紙〉

＊字数制限のあるものは、句読点や「」も一字として数えます。

受験番号

得点

〔一〕

問1
a
b
c
d
e

問2

問3
A
B
C
D
E

問4

問5

問6
x
y

問7

〔二〕

問1
a
b
c
り
d
e

問2
①
④

問3

問4

問5
になること。

問6

問7

〔三〕

問1
a
b
c

問2
ア
イ

問3

問4

問5
①
④

問6

問7

問8

令和四年度　大阪信愛学院高等学校　入学試験
〈国語科　解答用紙〉

＊字数制限のあるものは、句読点や「」も一字として数えます。

受験番号
得点

〔一〕40点

問1
a 相場
b 訓練
c 健全
d 突然
e 導入
②×5

問2
好奇心
②

問3
A カ
B エ
C ア
D キ
E ウ
②×5

問4
自分で、なにが「問題」なのか、その「問題」点をはっきりさせるとどういうことになる
⑤
＊解答例

問5
物事に対してなぜ、どうしてと疑問を抱くこと。
④
＊解答例

問6
x ア
y ウ
③×2

問7
オ
③

〔二〕30点

問1
a 特徴
b 瞬間
c 治り
d かど
e 点滅
②×5

問2
① 擬態語
② 倒置法
②×2

問3
ウ
②

問4
聞き上手で、興味を示して相手の話を引き出してくれるところ。
⑤
＊解答例

問5
誰かのためになること。
③

問6
（母は）ドレスには一べつもくれずに
③

問7
ウ
③

〔三〕30点

問1
a あわれ
b いずく
c ようす
②×3

問2
ア 3
イ 5
②×2

問3
猿
②×5

問4
このままついていくと殺されると気づいたから。
＊解答例

問5
① イ
② エ
③ ア
③×2

問6
エ
②

問7
エ
④

問8
ア
②